

狂言「底貫(春朔)」と茨木春朔

稲田 秀雄

あまり知られていないが、鶯流の伝右衛門派だけに「底貫(ていかん)」という狂言があった。夢幻能の形式をもじつたいわゆる舞狂言の一種で、美濃国垂井の宿を通りかかった南都の僧の前に、底貫という名の大酒飲み、の亡霊が現れ、酒甕の中に閉じこめられて、酒を「呑死(のみじに)」したことを酒尽くしの文句で語り舞うといった内容である。その詞章には、同じ舞狂言の「通門」「祐善」を踏まえた部分があり、これらの曲より後の作であることは明らかである。

この狂言は享保教本に収められている。そこには「此狂言春作ト云、警伝右衛門書上ケ候時、底貫ト改、文句モ少替ル、口伝」という注記があり、「春作」という曲を改作したものであることがわかる。

この「春作」の本文は、幸い、江戸末期の伝右衛門派の台本である野中本(実践女子大学蔵)によって知ることができる(「春朔」と表記。以下この表記による。享保教本に

次ぐ伝右衛門派の台本・宝暦名女川本の一冊にも収められていたが、散逸)。野中本によると、シテの名が春朔となっている他、僧が筑紫方の者であり、詞章にも部分的に「底貫」との異同がある。が、大筋は変わらず、眼目の酒尽くしの謡にも大異はない。要するに、シテの名を春朔から底貫に変えたことが、改変の最大のポイントだったのである。

底貫という奇妙な名は、「春朔」の「五盃十盃入の大盞も上戸の呑むはいと安し、ましては我は底ぬけの」や「彼頼光の酒盛もかくこそあらめ、其時の酒呑童子は大樽を大江山にひるがへし、今の春朔は猶まさりたる底ぬけの隠れなかりし酔狂の名をあげ」等の詞章に見える「底ぬけ」の語を生かして、人名に仕立てたものであろう。まさしく「底がない」ということで、酒呑童子も顔負けの、いかに大酒飲みに似合わしい名といえよう。それに対して、もとの春朔という名は、別段酒飲みと関係があるとも思えないが、何か意味あ

る人名だったのであろうか。

実は、近世初期に春朔という名の酒豪が実在していたらしい。そのことは、山東京伝『近世奇跡考』、斎藤月岑『武江年表』等によっても知られるが、ここでは十方庵大淨敬順の見聞を記した『遊歴雜記』の記事を引くことにする。

文政五、六年の記事を記した同書四編下巻・拾巻に、敬順が武州大師河原村の名主、池上太郎右衛門を尋ねた折のことを記している。この池上家において、慶安二年に、今より五代前の太郎右衛門行種(『池上家系図』によると、実はその子の幸広のことらしい。池上家文書五『水鳥記』「解題」入中道等氏執筆▽参照)と樽次なる者との「酒戦」が行なわれた。その時太郎右衛門が樽次に飲み勝ったしるしにもなった大盃が秘蔵されていることを聞いて、一見のため立ち寄ったというのである。敬順が見たその盃は、七合五勺入りの大きなものであった。そのことを記した後、敬順は樽次について次のように述べている。

されば樽次といふは、俗名を茨木春朔と号し、酒井雅楽頭の臣にして医を以て仕え、大塚の下やしきに住り。和哥になぐさみ、書を能せり。福王盛翁は春朔が自筆の哥書を得て家蔵とす。医業は上手な

りしや下手なりしや。酒に於ては高名にして、宴にのぞんで過酒する時は壺斗五升を飲み。故に酒の門人も数多ありけるぞ。

樽次なる酒豪の本名は、茨木春朔だったのである。この人物は地黄坊樽次と称して、かなりの名物男であつたらしい。この池上家における酒戦の顛末を軍記物風に仕立てた仮名草子に『水鳥記』（寛文七年刊）があり、春朔はその作者とも伝えられている（ただし、池上太郎右衛門幸広の作とする説あり。池上家には慶安三年奥書の写本があるという。守隨憲治氏「仮名草子に関する問題」『国語と国文学』昭32・11参照）。

『遊歴雜記』二編下巻・拾には、茨木春朔の墓所である谷中妙林寺の訪問記もある。そこでも「此者性質酒を好み、多く飲時にいたりては、更に腕推するものなかりし。分量八升を過すといへども、性みだれたる事なしとなん、依て酒の門人も若干ありしとかや」と記されている。

狂言「春朔」のシテには、この地黄坊樽次こと茨木春朔の面影がうかがえるのではなからうか。

「春朔」「底貫」に共通するシテの姿の描写に「法躰の身にて手樽をさげ」とある。享保保教本によれば、「底貫」のシテの装束は

「厚板 腰帶 十徳 通門頭巾」と、僧形に準じる出立ちである。医師もまた法体の者であつた。春朔が医師であつたとすれば、共通するイメージが認められよう。

「底貫」の末尾には、「此狂言武蔵ノ国ノ趣向ナレトモ、美濃国ニスル事、口伝」と注記する。底貫の亡霊が出現する場所を美濃国垂井としたのは、むろん「樽」の縁ゆえであるが、これによると本来武蔵国でのことを仕組んだものらしい（野中本「春朔」でも「樽井の宿」が舞台となつている。これも改變があるか。そうだとすれば、江戸大塚に住み、武州大師河原における酒戦で勇名を馳せ、谷中妙林寺に葬られたという茨木春朔に、よりふさわしいことになる。もっとも「武蔵野」自体にも大盃の意味があるけれども（武蔵野は広いので「野見尽くさぬ」||「飲み尽くさぬ」）。

また、前掲『水鳥記』の中に「吞死」の語が見えることも注目される。上―四「樽次道行の事」に、樽次が、茶屋の主に酒代を請求され、帰りに払うという言い訳を聞いてもらえず、怒るくだりに、

かほどつれなき主には、死んで後に思ひ知らせん。あの酒壺に飛んで入り、心のまゝに呑み死にし、五躰を赤くして荒狸々神と変じ、上り下りの上戸たちに、我

らがための本尊と拜まれん事の嬉しやと、思ひ切つて候ひしが、ましてしばしわが心……

とある。この箇所は狂言の「吞死」の発想に影響を与えた可能性があろう。

春朔の没年は、寛文十一年であるという（森銃三氏「地黄坊樽次」『森銃三著作集』続編第二巻所収）。春朔の亡霊が出るのであるから、狂言「春朔」の成立は、寛文十一年以降ということにならうか。成立後あまり上演されず、中絶状態になつていったのが、能・狂言ともに稀曲・珍曲の上演が盛んであつた元禄正徳期になつて、鶯伝右衛門（保教であらう）により、「底貫」として改作・復曲がなされたのではないか。享保保教本「蚌蛤（はまぐり）」（女体の蚌蛤の精をシテとする、これも鶯流固有の舞狂言）の注記に「近年珍敷狂言、御尋故諸流僉儀シテ、絶タルモ改、集タルヲ不残末世ノ芸者ノタメニ記、此内中絶少趣向ノ残タルヲ取立タル有」とある。「底貫」も、そのような「珍敷狂言」の一つであつたと推測されるのである。

（山口女子大学専任講師）